京都大学医療技術短期大学部紀要別冊
健康人間学　第1号　1988

「欲　望　と　願　望」

——セルフケアへの援助——

片　山　由　美

Desire and Request

—Nursing for Self-Care—

Yumi KATAYAMA

ABSTRACT: It is very difficult for a man to maintain and deepen his own health alone. The path from sickness to health and remaining healthy is not only a process of curing but also that of nursing care. But this ultimately aims to awake a patient to his own original desire to be healed. The turning form request of a patient to his desire is the most important problem of nursing. In this paper, I argued how nursing for self-care is possible.

Key words: Nursing, Self-care, Desire

は　じ　め　に

医療界がめざましい発展をとげた今，私たちがあらためて「健康」ということに注目し始めたのはそう新しいことではない。しかし一方でそれを実現してゆくことの困難さは増しているといえよう。

病院で治療行為が終了すると退院後の生活は個人に任される。医療における治療が進歩したとすると同じに，退院後の個人の生活管理が技術的にも，難しくなって来ているという面がある。例えば，導尿や，褥瘡の処置等，病室で行なわれてていた事が，個人や，家族の手に任されている現状もある。その中でも，欧米のライフスタイルの影響により，慢性疾患とカテゴライズされるもの，例えば，糖尿病，心臓病，通風，高血圧症などに日本人の羅患する率が高くなっている。これらの疾患は，原状への完全回復が難しくなんらかの障害を併って生きていかねばならない。血圧のコントロール，食餌療療法などで，病状の悪化を予防したり，また現症状の中で生活の自立を確立する方法など多く考え出されて来ている。そのため，必然的に生活の中で自己管理することが求められ，そのセルフケア技術の獲得如何が予後を左右すると言っても過言ではない。

昔ならある程度の回復の段階までは，医療が施設内で管理していたものが，現代の医療経済やもろもろの社会情勢の影響もあり，疾病の回復への途上で，セルフケアのみにそれがまかさ

京都大学医療技術短期大学部看護学科
Division of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University.
1989年3月5日受付

れるケースが多くなって来ている。医療が管理する疾病の回復段階が急性期で手いっぱいになればなる程，そのしわ寄せは個人にかかって来るのである。　このような中で私達看護従事者がどのようにセルフケアをサポートして行くかということを私なりの体験を通して考え直したい。

セルフケア概念と療養指導

宗像[1]はセルフケアについて大きく次の3つに分けている

1) 専門的な医療を拒否して一般の人々が自己治療を行なうもの
2) 保健医療従事者との協同的な性格をもつもの，つまりある面は保健医療従事者の意見や行為に従い，またある面は自己治療を行なうもの
3) 専門家の援助は活用するが，実際どのような行動をとる必要があり，どうするかは自分で判断し実行する。よって専門家はより適切なセルフケアを判断し，実行するように手助けするにすぎないというもの

いずれの立場に看護が介入するしないにかかわらず，健康を維持していくために個人の生活を変えなければならないことは変わりがない。誰がそれを行なうかということは，個人のセルフケアの概念によって違うが，もしこれを私達看護者がそれをしようとすると，大変困難な状況にぶつかる。腰痛や不快感を強く伴なう疾患であれば，それが動機付けになり，生活行動，意識は変化し易いが，慢性疾患の場合自覚症状が少ないということからも，動機づけはさらに難しい。高血圧症という疾病を例にとって，私なりにそれを考えてみた。その前にまずこれから使う言葉の定義を明確にしておく必要があるので広辞苑より引用することにして次に示したい。

要求[2]「強く乞いもとめること，強いて願い求めること。」

欲望[2]「ある行為を請求すること。
ほしがること。またほしいと思うこと。
不足を感じてこれを満たそうと望む心。」

欲求[2]「ほしがり，求めること，望んで要求すること。
動物や人間が行動を起こそうとする緊張状態。」

願望[2]「ねがい望むこと。ねがい。
欲望のように動機や目的を意識するとしないとに関係なく，心の中の緊張を解消しようとする傾向。」

以上のような定義を読むと，セルフケアにおいて重要な要素として，欲望と願望がポイントになっているのではないかと思われる。欲望と願望の大きな相違点は，動機や目的・意識の有無があるか無いかという事がわかる。慢性疾患に関して言えば，この願望はあったとしても，欲望に負けてしまうことがセルフケアの失敗の多くではないだろうか。これを高血圧症を例にとって具体的にすると図1のようになる。つまり願望よりも欲望の方がより強い力となってセルフケアに影響する。

健康になるということには，個人が健康になりたい，健康になるんだと意識する中で，疾病の部分のみにその具体的行動あるいは精神的変化があるのではなく，もっと強い動機が働いている。服薬したり，治療を受けるという時，個人は薬を飲む行為自体，受療行動自体を望んでいるのではなく，その終局にあるものを求めているからであろう。宗像[1]は，セルフケア行動をとるタイプとして次の2つをあげている。1つは入院経験が多かったり，疾病に対する脱弱感をもち，さらに自らの健康問題を含むあらゆる問題の解決に積極的に対拠しようとする，いわゆる「災い転じて福と為す。」タイプであり，2つ目は，家族などで人間関係が良好で，互いに認め合い，気持ちが通じ合うので生き甲斐がもて，また，自分が病気になることで相手に迷

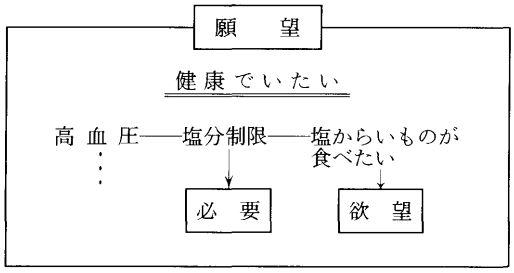

図1　病気の中でも慢性状態に関していえば，この願望はあったとしても，欲望に負けてしまうことがセルフケアの失敗の多くであるのではないだろうか。

惑がかかることを避けようと意識しており，さらに日頃から問題や悩みに積極的に対拠するタイプである。私自身，体験から感じるところを述べるとすれば，この2つのタイプ以外の他のどの要因も強い動機付けにはなりにくかった。さらに2つ目のタイプの人は，そのタイプの要因となっているものの中のどれかにアプローチすれば，比較的，生活行動の変容は容易であるかのようにも感じた。一人一人の健康をとりまく前後周囲の状況を考えると，個人は自分自身のみがかかえる要因より，周囲のそれによって強く動機付けられる。健康を自分だけの問題としてたった一人でとり組むには，とても荷が重すぎて自分自身に負けてしまう。もちろん常に自分を律することのできる人は良いが，そのような人は少ないのではないかと思う。

個人にとって危機感や，失望などの一時的な心の動きは長続きしない。それを意識して行動しなければならないからである。常にそれを意識して行動するのはとても苦痛である。苦しみの中で日々生活するよりも，楽しみの中で日々を送る方がずっと長続きするのは，当然であろう。先程，高血圧症の例をとって図1を作成したが，その中でも示してあるように，塩からいものが好きでそれを食べたいというのは，その個人の生活の中では楽しみである。それを否定するということは，その個人に失望の中での生活を強いることのみが浮き彫りとなる。そしてそれは結局長続きせず，もとにもどった生活となってしまう例が多い。看護における，禁止と脅しの行為の効果の持続の短さはこのことからも納得できる。

ではどうしたらセルフケアを持続させることができるだろうか。セルフケアの終局は健康にとどまらず，健康であればさらにその先にあるものに収束されている。健康の終局を考えてみると

★家族を背負っている
★子供の成長をになっている
★恋人がいる
★どうしても　やりたいことがある
★死や病への強い恐怖
⋮
etc

つまり，人がひとりの人間として，最終的に何を要求しているかということが最も強い動機付けになることが多い。目前の欲望は細かく，まさに目前のことであるが，それをいくら矯正しようとしても，健康のためのセルフケア行動，さらにその持続へは結びつかない。欲望に強くアプローチすればする程，健康とはかけ離れる傾向にあり，願望にアプローチすれば，多少その持続は望めるように思った。看護の世界ではこの現象を，「要求を欲求化する」という表現を使用することがあるが，私の申し述べたいのもそれと似たような事である。願望を欲望に変えることができれば，慢性疾患におけるセルフケアへの援助の早道を行くことができるのではないだろうか。その方法を見つけ出すには，種々の調査研究が必要であるが，今のところその調査研究の方法を模索中であり，示すところまでは至っていない。次には調査研究を通してこれらのことを裏付けたいと思っている。

学生の教育に関して思うこと

学生は勉強しなさいとよく言われるが，なぜ勉強したいと思わないのだろうか。

目前にある試験をパスしたい，再試験を受けたくないというのは願望であって，あそびたい，アルバイトをしてお金がほしいというのが学生

にとっての欲望なのだろうか。

看護の技術を習得することや，勉強するという言葉が示すように，終局というのは～するという目的である。それよりも～したいという欲望の方が強くそちらへ流れてしまうのだろうか。いずれにしても欲望も願望も入れ換わることは十分あり得るので，それをうまく動機付けるのも教育の大きな役割であろうと思う。

お わ り に

欲望と願望を計る尺度が無いこともあって科学的に推計することはできないが，看護における指導について，心理的側面へのアプローチの大切さ困難さを私なりに描いてみた。今後は調査研究を通してより，これらの裏付けをとる努力をしたい。

参 考 文 献

1）宗像　恒次・保健行動学からみたセルフケア．看護研究 VoL 20. No 5 1987.
2）広辞苑